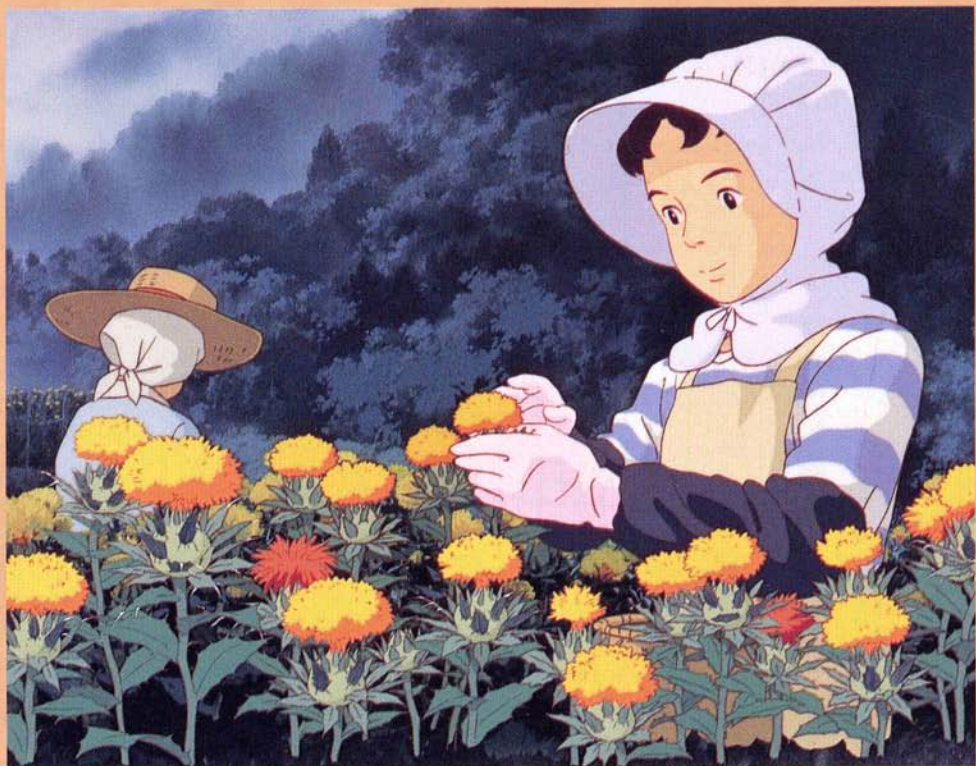


きびの栽培のなばにべ



山形県

平成8年3月



まゆはきを 梯にして 紅粉の花 芭蕉
行く末は 誰が肌ふれむ 紅の花 芭蕉

元禄2年5月（陽暦7月）、つゆの晴れ間に咲き始めた紅花への想いをこめて、芭蕉が「奥の細道」で詠んだ句といわれています。

紅花はアザミに似たキク科の花で、古名を末摘花、紅藍、久礼奈為とも呼ばれ、「半夏一つ咲き」「土用一つ咲き」といって、地域により、7月のつゆの時期から、つゆ明けにかけて、真黄色の花を咲かせます。

原産地地中海沿岸から、シルクロードを経て、飛鳥時代に渡来した紅花は、山形で美しく花ひらき、安土、桃山期から江戸時代にかけて、農村の貴重な商品作物として栽培されました。



紅花は、朝つゆをかきわけて、乙女たちが摘みました。摘みとった花卉は、紅餅に加工され、最上川を経て酒田を下り、海路京へはこばれました。その量は、宝暦期ごろ（1571～）乾燥した花餅で1千駄（1駄は馬1頭の積載量で120kg）、金額で5万両の記録が残っています。

花餅は、京の職人達の手で更に加工され、美女の唇を彩る「京紅」や、紅染めの原料となって、織物を染めあげられました。芭蕉が紅花を詠んだ元禄年間、山形産の紅花は、全国の6割から7割を占めていたといわれます。

目 次

1. 紅花の種類	2
2. 紅花の特性	4
3. 紅花栽培技術体系	6
4. 加工用紅花栽培ポイント	8
5. 紅もちの作り方	12
6. すり花の作り方	14
7. 乱花の作り方	16
8. 紅花染めの手順	18
切花栽培技術	21
<1> は種期と開花期	<2> 作型の特徴
<3> 栽培のポイント	<4> 病虫害防除



「おもひでぼろぼろ」：©岡本螢・刀根夕子・TNHG/1991